

＜女真進士題名碑＞の“進士”を表す女真文字について

中村雅之

1. 女真文字は解読されたか

金代に公布された女真文字は漢字と契丹文字を参考にして作られたものであるが、完全な解読には至っていない。女真語が清代の満洲語と極めて近い関係にあること、そして明代の対音対訳語彙集である『女真館訳語』が存在していることは、女真文字の解読に有利に働いたが、それでもなお、満洲語の中に対応する語形が見出せないものや『女真館訳語』に収録されていない語も多く、女真語の解読は道半ばと言わざるを得ない。

ここに掲げたのは＜女真進士題名碑＞としてよく知られている正大元年(1224)の碑文の碑額部分である。(古代文字資料館が管理している長田夏樹氏旧蔵拓本による。)



この女真文の全体が「進士の名を記録した刻石」というような意味であろうということは、ほぼすべての研究者の一致する所であるが、個々の語の解釈になると、杜撰な説明やコジツケ、あるいは単なる想像などが含まれ、十分に説得力のある解読がなされたとは言いがたい。語音と語義が確実と言えるのは、第1行(右端)の第4字「～の(i)」、第2行の上2文字「名(gəbu)」、そして第3行(左端)の下2文字「石(wəxə)」のみで、他は甚だ心許ない。

2. ＜女真進士題名碑＞の“進士”

ここでは上の碑額の最初の3文字「**瑪禮也**」について若干の考察を試みることにする。この3文字が「進士」に相当することは諸家の認める所であるが、問題はこの3文字をどのように読めば「進士」となるのかである。「進士」という概念自体がもとの女真語にあったはずはなく、漢語からの借用語であることは論じるまでもない。

安馬彌一郎『女真文金石志稿』(1943年)はこの3文字について、

us-in-si 「進士」の音訳である。(64頁)

とする。「進士」は13世紀において[tsinʃi]のような発音であったと思われるが、それがなぜ「us-in-si」と綴られるのかという説明はない。

これに先立つ羅福成「宴臺金源國書碑考」(『國學季刊』第1巻第4号、1923年)では、まず『女真館訳語』によって、3文字がそれぞれ「兀速」「因」「士(師の誤か?)」のように読むことを確認した上で、「兀速因」を急読すれば「進」になるとした(689頁)。実際には「兀速因」をどれだけ急いで読んでも[tsin]にはならず、これだけでは論にならない。

続いて、王静如「宴臺女真文進士題名碑初釋」(『史學集刊』第3期、1937年)は、「usu-in」では「進」の[tsin]と合わないが、それは女真語に[ts-]の音がなかったからだとする(50頁)。ここに至って初めて本質に触れたことになる。しかし、それに続く王氏の論は全く説得力を欠く。王氏いわく、[s]は母音に挟まれて有声化し、[uzu]となって[ts]に近づき、[zin]で「進」を表したのだ、と。漢語においても女真語においても[s]が有声化するという根拠がない上に、[z]の音を導くために[usu]という音の文字を用いるというのはあまりにも迂遠である。

女真語研究における一つの頂点とも言うべき金光平・金啓琮『女真語言文字研究』(文物出版社、1980年)は、「usu」を「us」と訂正した上で、満洲語では語末の[s]がしばしば[dz]と発音されることを引き合いに出して、[dzin]を意図したのだという(283頁)。満洲語を詳しく知りすぎていたが故に、かえって本質から遠ざかった感がある。女真語において音節末の[s]が[dz]と発音されていたとすれば、『女真館訳語』における対音は「兀速」でなく「兀資」のようになっていることが期待される。王静如の[z]にせよ、金氏たちの[dz]にせよ、「兀速」という対音を都合よく捻じ曲げていると言わざるを得ない。



### 3. 𡗗はなぜ「兀速」と音写されたか

まず問題となる第1字の𡗗であるが、『女真館訳語』で「兀速」と音写されていることについて考える必要がある。羅福成や王静如はそのまま[usu]としたが、上に述べたように『女真語言文字研究』はそれを[us]と訂正している。さらに、金啓琮『女真文辞典』(文物出版社、1984年)では、この字の音を

1. 兀速 2. əs 3. es 4. us 5. wúh-súh

としている(187頁)。1は『女真館訳語』の音写、2は金光平、3は山路広明、4は清瀬義三郎、5はグルーベによる標音だという。金光平氏の音が実際にはどの著作に示されたのかは明らかではない。『女真語言文字研究』では前述のように[us]であったから、その後いずれかの段階で[əʃ]と変えられたことになる。これは満洲語の語形を参考にした結果であろう。『女真館訳語』のグルーベ本では漢語「生熟」にあたる女真語として𡗗で始まる4文字の語があり、その漢字音写は「兀速・洪・兀魯・黒」である。『女真文辞典』ではその語形を、おそらくは満洲語を参考にして「əʃ-xuŋ uru-xə」としている。


そこで[əʃ]がなぜ「兀速」と音写されたかが問題となるが、これは元明の対音資料を見慣れた者には容易に理解できる音写である。「əʃ」に続く音に[u]が続くために、その影響で円唇母音を含む漢字を用いたのである。例えば、14世紀末の甲種『華夷訳語』におい

て、モンゴル語「elčün」（傍訳：使臣）を「額里臣」とし、「bolju」（傍訳：做着）を「孛魯周」とするのは、単音の [l] を表すのに、前後に前舌母音があれば「里」、円唇母音があれば「魯」とするやり方である。これと同様に『女真館訳語』でも [əʂ-xuŋ uru-xə] が円唇母音を多く含む故に [əʂ] を「兀速」としたと考えられる。したがって、 を [əʂ] とすることに障害はない。つまり、「進士」の「進」を表す女真文字「」は [əʂ in] と理解すべきだということになる。

#### 4. なぜ「進」を2つの文字で表すのか

「進」を [əʂ in] で表現した理由の第一は、王静如が見抜いたように、女真語に [ts] がなかったからであろう。この破擦音はウイグル語にもモンゴル語にも満洲語にもなく、この音を持つ漢語語彙を借用する際にはいずれも [s] をもって表した。日本漢字音も全く同様である。女真語においても同じ方式があったことは容易に想像がつく。では「進」は [sin] でよいかというと、おそらく女真語には [si] もなかった。満洲語でも同じであり、日本語も同様である。つまり、[s] の後に [i] が続くと、自動的に [ʃi] と発音される。そこで [sin] を表すために工夫されたのが [əʂ in] であった、と考えるのが最も合理的である。日本語では「ス」と「イ」の組み合わせを用いて「スイン [sin]」と表すが、女真文字では [əʂ] と [in] の組み合わせで、[əʂ in] > [sin] を表そうとしたのである。

#### 5. むすび

「」の3文字を「進士」と読むためには、以上のような検討を経る必要があった。明らかに漢語語彙であることが分かっている語でもこのような状況であるから、固有の女真語に至っては、解読の困難はより大きい。現在も解読が進行中の契丹小字は、漢語からの借用語彙の綴りを検討することによって、元字の音価を定めるという重要な一步を踏み出したのであるが、女真文字の場合は『女真館訳語』が最重要と見なされた故に、漢語語彙の綴りの検討は不十分なまま停滞している。漢語語彙の検討は、女真語の音韻の究明にも一定の役割を果たし得ると考える。